

# 随泉寺寺報

2003年 10月号 第398号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

秋季永代経法座

講師 順正寺住職 武田公丸師

講題 「正信偈に聞く」

幾世へて 後か忘れん 散りぬべき 野辺の秋 萩みが  
く月夜を (深養父・後撰集 317)



「どんなに時を経ても忘れるものか。こぼれんばかりの野辺の萩を照り輝かせる月の夜を」

・屏風絵のような美しい歌。‘後か忘れん’というキザな表現も好きです

星 と たんぽぽ  
青いお空の そこふかく、  
海の小石の そのように 夜がくるまで しずでる、  
昼のお星は目に見えぬ 見えぬものでも あるんだよ、  
見えぬものでも あるんだよ。  
ちってすがれた たんぽぽの、かわらのすきに だあまって、  
春のくるまで かくれてる、つよいその根は 目に見えぬ。  
見えぬけれども あるんだよ 見えぬものでも あるんだよ。

## 10月の法座予定

9月29日午前11時より.....本部役員会  
10月14日昼席午後1時より.....秋季永代経法座  
10月14日夜席午後7時半より.....出張法座 西長者  
原 集会所  
10月15日朝席午前10時より.....65歳以上の集  
い  
10月15日昼席午後1時より.....秋季永代経法座



## 第3回随泉寺灯茶会

今年も灯茶会を開催しました。今は24時間光にあふれています。暗闇になるとなんとなく不安で、恐怖心さえわきます。暗闇は心の中にもあります。健康で光り輝いているときは思いませんが、時に人は、生きる気力を失うことがあります。人生に夢や希望を失い、自ら命を絶つ方もあります。欲望に身も心も支配されている人や深い嫌悪感に苛まれている人。迷い、疑い、恨み、妬み、怒りは、人間の心の中で際限なく広がり、気がつくとも明日に希望も抱けない生き方に陥ります。まさしくこころは闇です。光に満ちた現代社会で、満たされず、淋しさや悲しみを抱え、手探りで何かを求めて街角を彷徨う人々も、心の中で暗闇が広がり、一条の光りを求めて止まない人々たちなのです。



末法という娑婆世界では、実に多くの人々が、心に「闇」を抱えて生きています。普段、気づくことがなくても、「心の闇」は誰の心の中にもあり、探せば見つけることが出来るものです。暗闇の中でその闇を破ってくれるのは光です。こころの闇を破ってくれるのは確かなみ教えです。親鸞聖人のご和讃に「無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」とあります。暗闇の中に光る無数の光を眺めながら、参加して下さった人々は何をお感じになったでしょう。

来年も開催する予定です。来年こそはご参加ください。

## 第35回 65歳以上の集い

10月15日午前10時より今年も65歳以上の集いを開催いたします。

そろそろ後がなくなってきました。年に不足はありません。誘い合わせてお参りください。

## お知らせ 焚焼会法要(11月15日)

お参りに行ってよく頼まれたり、相談を受けることがあります。それは古い仏具やお寺からの新聞や、どこからかわられたお札等の処分についてのことです。また古い先祖の遺品など、なかなか処分するのに抵抗があります。罰が当たったら困る、あるいは粗末にはしてはいけないなどと、なかなか焼いたり、捨てたりできません。庭先で焼いてくださいとお勧めするのですが、実行できないようです。お寺で古いご本尊は本山に返します。その他の物は、お勤めの後、一緒に焼きます。

当日(11月15日)お寺まで持参ください。

# 平和の鐘



随泉寺には鐘が三つあります。ひとつは、梵鐘(おがね)ひとつは、喚鐘(ちいさい鐘) さらに、もうひとつ喚鐘(ちいさい鐘)があります。

戦争中、日本は金属がなくて兵器や大砲の弾を作るのに、各家庭から鍋や釜、仏具まで供失させました。随泉寺の梵鐘(おがね)や喚鐘(ちいさいかね)も例外ではありませんでした。昭和19年にみんなでお見送りをして、送り出したという記憶をしておられる方もおられます。

終戦後、船越の日本製鋼所の庭に沢山の鐘が兵器や大砲の弾にならずに、放置してあるということで、ご門徒の皆さんが大八車で取りに行かれたそうです。あいにく、随泉寺の鐘は探しても無かったの

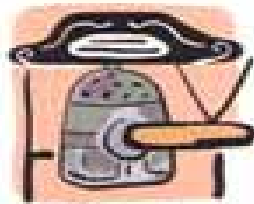
で、適当なものを持って帰ってきました。梵鐘はそれを昭和36年ごろまで吊っていました。その後、やはりよそのお寺の鐘では、情けないので、随泉寺の鐘を作ろうということで、新しい鐘を鑄造してもらいました。

喚鐘(ちいさい鐘)はどういう訳か判りませんが、随泉寺の鐘がありました。

ここからは私(住職)の推測ですが、大きい鐘(梵鐘)は提供したのですが、小さい鐘(喚鐘)はどこかに保管していたのではないかと思います。船越からは両方持って帰ってきたのですが、ちいさい鐘は随泉寺があるので、それを本堂

の南側の縁の上に吊りました。ですから今使用している鐘は随泉寺のものです。船越から持って帰った鐘はせっかくだからということで、そのまま、本堂の北側の縁の上に吊ってありました。

平成12年の本堂修復のとき、鐘が壊れてはいけないということで、両方を降ろしてもらいました。その時に鐘に彫ってある文字を読んできましたが、北側の鐘に「出雲の国 大原の郡木次村 洞光禅寺」と銘打ってありました。



今から300年も前の鐘です。随泉寺の皆さんと相談した結果、その時は本堂の修復やら、継職法要などで混乱しているので、行事が済んだ後、検討しようということになっていました。

今年になって鐘のことを思い出し、再び皆さんと相談した結果、元のお寺に返そうということになり、連絡をしたら、洞光禅寺の皆さんも喜ばれ、この度、お返しすることになりました。9月の29日迎えにこられることになり、皆さんでお見送りします。

考えてみると、この鐘は仏法を伝える役目をしていたのですが、事に依ると人を殺す兵器や、大砲の弾になっていたかもしれません。お寺の本堂にあるときは仏法を伝える働きを、兵器になったときは人を殺す役目をするのです。これは縁が在るとどうということになるか分からないということでしょう。

## 『安らかに』

主人が亡くなってから2ヶ月が過ぎ、仏壇に座り、未だに主人が亡くなったと思えず、

『お父さん(主人に事)早くご飯を食べに出ておいでえよ...』と独り言を言っは、手を合わせて、涙を流す毎日です。

私とは無理をして人生をスタートし、なぜ死ぬ時、自分一人であの世にいったのかと...。箸一本から出発して、苦労、苦労の人生でした。年の差も少しあったので、親のように思ったりして、時にはきつい言葉もかける人でした。根は優しい人だったと思います。

定年になると病気と闘い、一生懸命看病し、治療の甲斐もなく、九年目にして浄土に行きました。私も途方にくれて、なかなか立ち上がれず、くよくよするのが嫌いな人だったので、元気を出さなければと思いながら、廻りの人様に助けられています。これから先も、子供や孫達に囲まれて、私の力の限り、供養していきます。これから先、浄土で私達を見守ってください。

平成15年7月19日

藤原 幸子

平成15年5月19日

藤原 琢而

往生

行年69歳

